

旧神田孝平所蔵石棒について——明治六年開催「博覧会」の意義——

徳田 誠 志

一、はじめに

関西大学博物館は平成六年に開館し、学生の教育・研究の場として活用されている。さらに近年では大学という枠を取り払い、社会連携を実践する場として、大学と地域を結びつけるという役割も担っている。

この関西大学博物館は館としての歴史はまだ十数年に過ぎないが、その前身は「関西大学考古学等資料室」であり、末永雅雄先生が昭和二十七年に着任されてまもなく、本山彦一コレクションが移管されたことを嚆矢とする。よって、六〇年近い歴史を重ねてきていることになるが、筆者は在学中より折に触れ、所蔵資料を観察し、学ぶ機会を得てきた。その結果、関西大学博物館所蔵資料の中には、江戸時代の弄石家の手元にあった石製品が含まれていることを明らかにした。そして彼らの活動は、近代博物館の礎となるものであることを論じてきた。そのほかにも弄石家が石器の収集に熱を上げるからこそ、その当時に作られた石器の「贋作」が存在することを指摘した。この贋作については、考古学資料としては明確に排除しなければならないものであるが、贋作が製作された背景を知ることによって、博物館に所蔵すべき資料となりうるという結論を提示した。

さて、小稿では関西大学博物館所蔵資料の中に、明治六年に開催された博覧会に出品された石棒があることを紹介することとしたい。この明治一ケタという時代は、まだ「考古学」という言葉すら存在せず、もちろん「博物館」とはなんたるかも理解されていない。このような時代の中で開催された「博覧会」という事業を振り返り、その開催意義を考えていくことを目的とする。そこには、誰が、どのような「モノ」を出品したのであろうか。そして一四〇年ほど前の博物館活動から、今日、博物館が「冬の時代」といわれる状況を打開していく際の糸口を見いだすことができればという思いを込めて記述を進めていきたい。

二、明治初期における博物館政策について

今回取り上げる「博覧会」は、明治六年に博覧会事務局（山下門内博物館）が主催し、四月一五日から七月三一日まで開催された展示会である。本節ではこの博覧会の趣旨を理解するために、それまでの明治政府による行政的な動きを振り返っておくこととしたい。明治前半代における博物館政策はめまぐるしく所管官庁が入れ替わり、非常に複雑な動きを見せる。この混沌とした状況こそがまさに「博物館」誕生の前史であ

るが、博物館成立史については椎名仙卓氏や関秀夫氏らによって蓄積された研究成果がある^①。よって両氏の業績に導かれながら記述を進めていくが、大きくは人文系と自然系の博物館活動に大別することができる。そこへ大きな影響を与える事項が、日本がはじめて国として参加することとなったウィーン万国博覧会である。このウィーン万国博覧会は、新生日本が国際舞台にアピールする場として何としても成功しなければならぬイベントであっただけに、多くの人物が関与することになる。そのため小稿では、博物館行政を担当した人物の主な活躍分野によって「人文系」「自然系」そして「万博系」という区分を用いて記述を進めていくこととしたい。

まず「人文系」であるが、これは人間が作り出してきた「モノ」を保存・収集していくことを博物館活動の主業務にすることを目指した人々と規定する。この動きはまず、明治四年五月に太政官から「古器旧物保存方」の布告という形によって示される。これは後の文部省という組織になる「大学」が、その前月に太政官に向けて「集古館」の設置を献言したことを受けた措置であると位置づけられる。そして同じ五月には招魂社境内で、新政府が主催するはじめての「物産会」が開催されている。

この人文系の博物館政策を推し進めた人物としては、町田久成をあげることができる。彼は旧薩摩藩士であるが、新政府へは外務省へ出仕したのち、文部省へ異動し博物館行政に従事する。そして明治一五年には、上野に誕生した「博物館」の初代館長に就任することとなる。しかしながら彼は開館後まもなく館長を辞し、出家してしまう。その後は表舞台

からは遠ざかり、明治三〇年九月に逝去する。その墓は、彼が出家した琵琶湖畔にある法名院の裏山にひっそりと営まれている（写真1）。

もう一人「人文系」の代表人物としては、蜷川式胤をあげておきたい。彼の最も著名な活動は明治五年に政府としてはじめて実施した宝物調査を担当したことであり、いわゆる「壬申検査」を牽引した人物である。この調査は先述した「集古館」建設の献言にもあるように、当時「厭旧尚新」の風潮が強まり、古来伝えられてきた古器旧物が隠滅している現状を憂い、保護する政策の一環としておこなわれたものである。これは旧来の価値観を否定し過ぎた結果、一般に「廃仏毀釈」と呼ばれるような寺院の什宝が失われるという事態に歯止めをかけることを目的としていたと考えてよい。

この「人文系」の活動は、確かに江戸幕府の瓦解に伴う価値観の転換によって多くの器物が失われたことをきっかけとするが、古器旧物の保護という事業の萌芽は江戸時代に認めることができる。具体的には松平定信による『集古十種』の編纂事業をその代表として位置づけることが可能であろう。本書は定信が老中を退任したのち、寛政一二年（一八〇〇）に全八五冊で刊行された。「十種」とあるように「碑銘部」「鐘銘部」「兵器部」「銅器部」「楽器部」「文房部」「印章部」「扁額部」「肖像部」「古書画部」にわけて、この時点における保存すべき古器物が描かれている。この区分は「古器旧物保存方」の別紙に記されている、保存すべき三二部門との類似性が、よく指摘されているところである^②。この『集古十種』は、江戸時代における集古図の手本になったものであり、刊行から約半



写真1 町田久成墓（滋賀県法明院）

世紀後には水野忠央によって『丹鶴外書』の一冊として『ちとせのためし』が出版されている。この図譜に描かれている古器物の区分も基本的には『集古十種』の分類を踏襲しているといつて差し支えない。このように見てくると明治維新による「厭旧尚新」の風潮が、新政府をして古器物の保護に取り組む一因となっているものの、何を保護していくかという大枠は江戸時代にすでに確立していたことが指摘できる。

このように町田といひ蜷川にしる人文系の博物館活動は、明治新政府による業務であることはまちがいないものの、根底には彼らの性質に好古的嗜好があることは確かである。その上で彼らは古器物が、制度や風俗の沿革を考証するために有用なものであることを周知させるべく活動

する。すなわち「古器物」という用語を用いているものの、この言葉の中には現代のわれわれが使用する「文化財」としての価値を見いだしていることを指摘しておきたい。

続いて「自然系」の博物館活動を実践した人物としては、田中芳男が筆頭に名前があがる。彼は天保九年（一八三八）に現在の長野県飯田市に生まれ、一七歳の時に名古屋へ向う伊藤圭介の門下において本草学と医学を学んでいる。伊藤は尾張を中心として活動していた菅百社の中心メンバーであり、のちに幕府の学問所である蕃書調所に出役した。さらにこの組織が明治政府に接収される形で大学南校物産局へ引き継がれていくことになり、さらに文部省と名前を変えてからも、彼はそのまま勤務を続けることとなる。先述した招魂社境内で開催した物産会の企画と展示運営は伊藤を主担者として実施されたものである。そして田中芳男は伊藤の一番弟子として、師の事業を継続していくこととなる。彼らの本質は、あくまでも江戸時代の「本草学」・「物産学」を基本として、博物館及び博覧会というものを考えていることにある。

江戸時代の「物産学」を簡潔に記述することは難しいが、その代表的な活動としては、平賀源内を主催者として宝暦一二年（一七六二）に江戸湯島天神において開催された「東都薬品会」がある。これは薬品として有用な植物を全国各地から集め、薬用植物標本を一堂に会するものであった。この成果は平賀によって『物類品隲』という書物にまとめられた。^④

江戸時代の「物産学」には、植物を中心とする「本草学」はもとより、鉱物を含む石の収集を目的としたグループも出現し、その代表的人物が木

内石亭である。^⑤

このように江戸時代の物産会は、植物・鉱物等を収集し、さらには分類すること、あるいは名称を統一し、その有用性を検討することを活動の中心としている。そして会期は限られているが、多くの人々に展覧することも大きな目的としている。それゆえ江戸時代における「物産会」は、博物館機能としての「普及」・「収集」・「研究」という活動と一致する部分があり、伊藤や田中が新政府において博物館政策に従事したことも首肯できることである。その一方で博物館と決定的に異なる点は、主催者が個人であり、さらに決まった展示場を持つこともなく、展示品も個人の収集品が中心となっていることであろう。さらには展示された物品の売買も可能であったことから、収集資料の永続的な保存は意図していなかったともいえる。

このように江戸時代の本草学の流れを汲んだ二人によって進められた自然系の博物館活動と、町田・蛭川等による人文系の博物館活動とは相容れる部分が少なかったように思われる。町田のあとを継いで田中は上野にできた「博物館」の館長となるが、半年ほどで退官している。

以上述べてきたように、初期の博物館政策は人文系の背景を持つ人物と、自然系の流れを汲む人物によって進められていくこととなった。そこへ大きな課題として持ち上がってきた出来事が、ウィーン万国博覧会への日本国としての参加という事業である。この万国博覧会に参加することによって、わが国の「博物館」は次の段階を迎えることになるが、この博覧会に関与した人物を「万博系」としてまとめておきたい。

ウィーン万国博覧会は、明治六年（一八七三）に、オーストリア皇帝

フランツ・ヨーゼフ一世の治世二五周年を記念して開催されたものであり、会期は約半年であった。この博覧会への参加要請を受けた政府は、早速政府内に博覧会事務局を設置し、参加の準備を進めていくことになる。この博覧会への参加は新生日本の世界に向けたデビューであり、さらには殖産興業の起爆剤とすることが目的であった。博覧会において日本国内の物産や工芸品の優れた技術を紹介することによって、陶器・漆器・織物などの輸出が増加することを目論んだものである。もちろん出品物は工芸品だけでなく、日本文化を紹介することを主眼とした物品も選定された。^⑥

この博覧会事務局は参議の大隈重信を総裁とし、さらには工部大丞の佐野常民が副総裁となっている。しかしながら実務作業は、町田久成と田中芳男が従事することとなる。彼らは先述したように政府内で博物館政策を担当していた人物であり、且つ慶応三年（一八六七）に開催されたパリ万国博覧会にも参加していることから、彼らが博覧会事務局に加えられたと考えられる。

こうして組織ができ、従事する顔ぶれが揃うとともに、出品物の選定作業に入る。その選定作業には、ドイツ出身のお雇い外国人教師であったゴッドフリード・ワグネルが佐野の要請を受けて関与することとなる。さらには、江戸時代のオランダ商館医として来日したフィリップ・F・シーボルトの息子であるアレクサンダーとハインリッヒの兄弟も加わっている。ハインリッヒについては別稿で彼の考古学的な功績をまとめたことがあるが^⑦、蛭川等の好古家とも親しく交際していたことが知られており、外国人の目から見てウィーン万国博覧会に出品すべきものの選定

をおこなっていたことが知られている。

このような選定作業を経て、博覧会事務局へは各地の特産品が多数集められることになる。そして物品はすべて二品ずつ集められ、そのうちの一つがウイーン万国博覧会に送付され、もう一点は国内に留め置かれて博物館資料として収蔵されることとなった。

以上、明治初期の博物館をめぐる動きを「人文系」「自然系」「万博系」に区別して述べてきた。もちろん彼らがこの区分を意識していたかどうかは不明であり、実際には同じ部署で活動することが多かったために協力して業務を進めていったことはまちがいない。しかしながらそれぞれの出自の違いは、「博物館とは何か」という問題への理解において、お互いの考えを十分統一できないままであったように思われる。

三、明治六年の博覧会と出品者

ウイーン万国博覧会は明治六年五月一日に開会したが、出品物は一月三〇日に横浜港から発送された。そしてこの間、三月には文部省博物館・書籍館・小石川薬園が博覧会事務局に併合されることとなった。この併合が文部省系と内務省系の対立を招くことになるが、いずれにせよ前年に内山下町に移転していた博覧会事務局に古器旧物から自然系資料、さらにはウイーン万国博覧会に出品した残りの特産品が集められることとなった。ここに博覧会事務局に属する「博物館」が誕生することとなり、所在地名をとって「山下門内博物館」と呼称される施設ができあがる。この敷地内には六棟の陳列館が存在し、古器旧物を展示する陳列館から、

動・植物さらには鉱物を展示する施設が存在した。他に農業館と農具の展示施設、さらには国内で製造された品々、あるいは舶来品が陳列される展示館が存在することとなった。すなわちこの「山下門内博物館」は、古器旧物の保護を目的とした博物館機能と、殖産興業を目的とした博覧会機能が並列することとなり、さらには「博物館」という看板が掛けられていたものの、その中には「植物園」「動物園」も同居する施設であった。

そしてこの博覧会事務局は、四月一五日から六月一五日までの二ヶ月間の予定で「博覧会」を開催することを立案した。この時の「公示文」が残されているので、左記に引用しておく。⁸⁾

於山下御門博覧会事務局来ル四月十五日ヨリ

六月十五日迄毎日午前九時ヨリ午後第四時迄

博覧会

今般 澳国博覧会へ列ネシ品物並ニ博物館及諸家珍藏ノ奇品ヲ一所ニ陳列シテ 普ク衆人ノ来観ヲ許ス

一 来観人ハ男女ヲ論セス一人一枚ヅツ切手ヲ以テ縦観可致事

但、切手ハ博覧会事務局ニ於テ売渡シ可申、且代価ハ一枚ニ付

二 銭ヅツノ事

一 珍奇ノ品物 新發明ノ器械等ヲ蔵スル者ハ、出品シテ此会ノ欠

ヲ補ン事ヲ乞フ

但、品物預り證書相渡シ置、入用ノ節ハ何時ニテモ證引換差戻シ
可申 又重大ノ品ハ運搬人夫差出可申事

一 澳國博覽會へ陳列セシ剩余ノ品ハ、価ヲ定テ払下ニ相成候条望
ノ者ハ掛リ官員へ可申出事

明治六年三月 博覽會事務局

この「公示文」を見ていくと、この「博覽會」の主旨が見えてくる。当然のことながら第一の目的はウィーン万国博覽會に出品した残りを広く展示することである。そして、男女を問わず入場を許可すること、入場料として一人二銭を徴収することが明示されている。この時の二銭がどれほどの価格であるかは、比較する物価によっても変動するため一概にいえませんが、観覧料を徴収することに意味があったと考えられる。続いて、一般からの出品物をさらに募集していることがわかるが、文中にある「珍奇」という言葉は今日的にはやや不適切な用語にも思えるが、あくまでも博物館に展示する意義があるものと理解したい。そして最後の一項目は、余剰品の販売を認めているものであるが、この点は江戸時代以来の「物産會」的な要素を残しているといえよう。

この「博覽會」は当初二ヶ月の予定で始まったが、観覧者が多数つめかけた結果、二回の延長となり結果的には七月三一日に終了した。博覽會事務局にとっては大成功であったと思われる、入場料収入も予想以上であったことが窺える。但し、一般の人々にとって「博覽會」の意義をどこまで理解していたものか、換言すると「見せ物」的な興行との違いを十分に理解していたか否かは不明である。

そしてこの「博覽會」に展示された資料については『博覽會列品目録』「人造物部一号」「人造物部二号」とした紙本墨摺の印刷物二枚が残されている(写真2・3)。この「人造物」とは「人が作ったもの」という区分を示すものであり、他に「動物部」の目録一部も残されている^⑥。その他の部門については『目録』は残されておらず、製作されたか否かも含めて不明といわざるを得ない。

さて、この『目録』から、誰がどのようなものを出品したかは一目瞭然であるが、出品された人造物には考古遺物・歴史資料から最新機器類までを含んでおり、整理・区分することが難しい。あえて区分するのであれば、「古器旧物保存方」の別表にあげられた三二項目にそつた分類になろう。

よつて今回は出品物ではなく、出品者の区分を試みたい。まず出品者の顔ぶれの中で、博物館事務局に関係した人物の名を見つけることは容易である。具体的にはこれまでも登場した「町田久成」「蜷川式胤」「田中芳男」の三氏である。さらに「内田正雄」「小野職愨」も博物館に勤務した人物である。田中については「自然系」の代表者としたところであるが、「人造物」においても舶来品など一二件を出品している。また、「織田信徳」は、古器物からアイヌの民俗資料など最多となる三〇件の資料を出品しているが、彼はこの博覽會以前に明治政府から謹慎処分を受けており、多数の出品は政府への恭順的協力の姿勢を見せているとも考えられる。学問としては動物学を主に学んでおり、どちらかといえば「自然系」の人物に区分できよう。

一方、「人文系」の人物としては蜷川が実施した「壬申検査」に同行し、



写真2 『博覽會列品目錄』「人造物部一號」

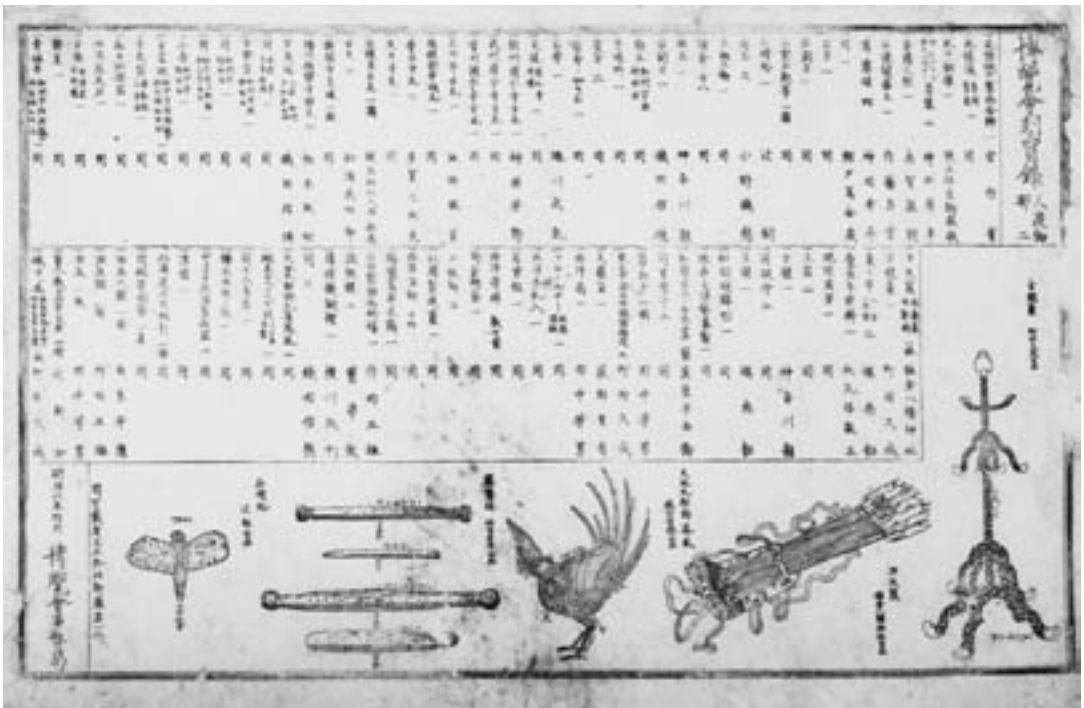


写真3 『博覽會列品目錄』「人造物部二號」

仁徳天皇陵の前方部石室が露出した際には、現地において見取り図を描いた「柏木政矩」の名を見つけることができる。彼は明治四年に大学南校が主催した「物産会」においても古器物（石器類）を出品しており、博覧会の出品者としては常連であったことがわかる。もう一人、好古家としても著名な「松浦武四郎」も古瓦を出品している。彼は「北海道」の名付け親であり、蝦夷地の探検において名を残しているが、その一方で古器物の収集家でもあり、その成果は彼が刊行した『撥雲余興』という図譜に示されている。^⑩

そのほかの出品者グループとしては、博覧会事務局職員以外の政府役人という区分が可能であると考ええる。この中に「神田孝平」も含まれることができるが、他には教育者として著名な文部省の「辻新次」、あるいは外務省に勤務した「志賀親朋」、司法関係で功績を残した「大久保親正」らの名前をあげることができる。

もう一つ出品者をグループングするとすれば、「文化人・医師」という区分けが可能であろう。具体的には木挽町狩野派に繋がる「狩野勝川」や、同じ絵師としては植物画に才能を発揮した「加藤竹齋」である。また、医師としては旧薩摩藩医「前田元温」や、「高嶋祐啓」・「須田経哲」もこのグループに含まれる。

このように『目録』に個人名が掲載されている六二名を分類していくと、その中で姓名の上に官位が記されている人々を見いだすことができる。この官位を持つ人物は、幕藩体制下における藩主であったと考ええて間違いがない。最も官位の高い従三位を持つ人物は「前田慶寧」であり、彼は加賀藩最後の藩主であって、一代将軍家斉の外孫にあたる人物で

ある。そのほかにも従五位の官位を持つ人物が多数登場するが、いずれも幕藩体制下における旧藩主である。一覧にすると、次のとおりである。

朽木為綱（丹波国 福知山藩）

堀田正頌（下野国 佐野藩）

大久保教義（相模国 荻野山中藩）

久松勝慈（下総国 多胡藩）

佐竹義理（出羽国 新田藩（岩崎藩））

内藤政拳（日向国 延岡藩）

毛利高謙（豊後国 佐伯藩）

石川成之（伊勢国 亀山藩）

伊東祐婦（日向国 飫肥藩）

森 忠儀（播磨国 赤穂藩）

森 俊滋（播磨国 三日月藩）

このように旧藩主が、数多くの出品物を展示した理由は次の博覧会事務局から発せられた「口達」によるものと考えられる。^⑪

「御国ニ於而も追而ハ永世之博物館御取設相成候ニ付而ハ普く諸物品御取集可有之ニ付銘々祖先以来伝来之宝物重器を始め其外珍物奇品所持之族者不漏様銘書取調可差出尤壳払候而も不苦品ハ相当之代価を以御買上可相成候（以下、略）」

この口達は、明治五年四月に在京の華族に向けて発せられている。この時代、旧藩主である大名華族が古器旧物の最大の所有者であったことはまちがいない。彼らに所蔵品の出品を求めることは当然であったと考えられる。

このように大名華族が所持品を貸与することは明治五年に湯島聖堂で開催された文部省博物館博覧会においても同様であり、その一例としては福岡藩藩主であった黒田長溥が志賀島で出土した金印を出品している。このように博覧会に出品した旧藩主は、戊辰戦争にあつては幕府方、朝廷方様々であるが、各華族は素直に博覧会事務局へ所持品目録を提出したようである。但し、博覧会事務局がどの程度の資料を買い上げたかについては不明である。

以上、明治六年の博覧会を、その出品者から見てきた。この博覧会以降、山下門内博物館が展示会場として固定され、上野へ移転するまでこの地を拠点とする。この点においては近代的な「博物館」といえるが、出品物の多数が個人の所蔵品であること、そして余剰品はその場で売買できる点については、江戸時代の「物産会」的な色彩をまだ残しているともいえる。

四、神田孝平所蔵の石棒と森俊滋所蔵の銅鐸

これまで明治六年に開催された「博覧会」に至る経緯と、その出品者を見てきた。本節では、この「博覧会」に展示された考古品のうち、神田孝平が出品した石棒と、森俊滋が出品した銅鐸を見ていくこととしよう。まず、神田孝平の出品した石棒から見ていきたい。その前に神田の略歴であるが、天保元年（一八三〇）に、現在の岐阜県不破郡垂井町で生まれ、幕末には蕃書調所の教授として出役する。そのまま明治政府にも出仕し、明治四年には兵庫県令を拝命している。博覧会の開催された明

治六年には神戸在住であったと考えられるが、二件の人造物を出品している。そして兵庫県令を退いた後、明治一〇年には文部小輔として、大森貝塚出土品の天覧にも係わっている。その後、元老院議員、貴族院議員を歴任し、逝去直前に男爵を授けられている。¹³⁾

このように神田は明治新政府において、エリート官僚としての生涯を送ったが、その一方で好古家としての活躍も数多く知られている。その一端を示す事柄が、エドワード・S・モースが刊行した大森貝塚の発掘調査報告書において、蜷川式胤等とともに名前が記されていることであろう。そしてモースをして「日本ほど考古学に関心を持つ人が多い国は世界中他にどこにもない」と言わしめた、その一人が神田であったことはまちがいないところである。神田がいつ頃から古器物の収集を始めたかについては、明らかとなっていない。ただ、明治四年に横山由清が刊行した『尚古図録』には、神田が所蔵する考古遺物が掲載されており、それ以前に収集が始まっていたことがわかる。¹⁴⁾

なお、横山も明治政府に出仕しており、神田とは親しい関係にあったことが知られている。それゆえ神田の好古趣味についても、彼の影響があつた可能性も考えられる。

さて、明治六年の博覧会に神田が出品した資料は、『博覧会列品目録』「人造物部二」下段中央に図が掲載されている石棒である（写真4）。そして、絵図の横には「霹靂礮（へきれきちん）」と記してある。この霹靂礮という用語は、江戸時代の弄石家が石器に付した名称である。「礮」とは、本来衣を砧で打つ台の意味であるが、台石に限らず石斧・石環など石器全般の名称として使用している。そして「霹靂」とは、「落雷」や

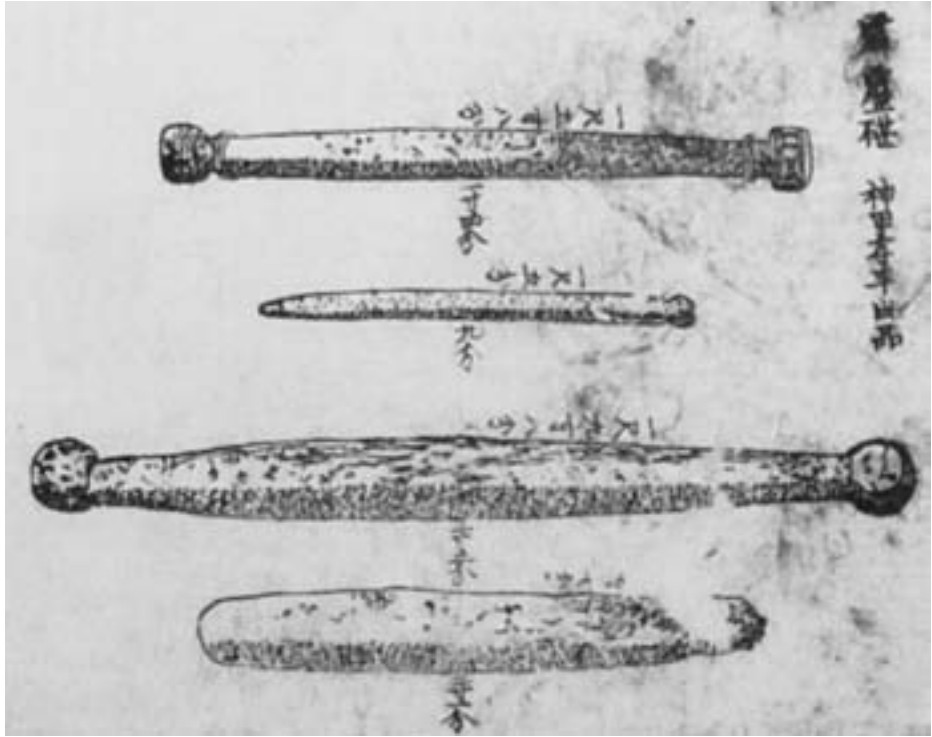


写真4 神田孝平出品霹靂礎絵図（写真3一部拡大）

「雷」のことであり、弄石家は今日でいう石器を雷神の使用していた道具という意味を込めて命名したものである。考古学[®]という概念が存在しない時代にあつては、石器が人によって製作されたものであるという意識がなかったことから、「雷神」の道具という想定をおこなったものである。よつて、この命名の是非を今日的な観点から論じることは無意味である。しかし今日でも雨上がりに遺物の表面採取がおこないやすいことを考えると、雷雨のあとに石鏃などの石器が採取されることは多かつたと考えられ、石器を雷と結びつけたことにはそれなりの根拠もあつたと考えられる。

そしてこの「霹靂礎」が明治六年の展覧会へ出品されている理由としては、「古器物保存方」の別表に示された三二品目の中に「石弩雷斧之部」という項目があり、具体的には「石弩」「雷斧」「霹靂礎」「石劍」「天狗の飯匙」等として名前があがっていることによるものと考えられる。明治六年の段階では、この「霹靂礎」が何であるかという解釈は江戸時代のままであり、名称もそのまま引き継いだものと考えられる。繰り返すことになるが、このこと自体は当然のことであつて、今その是非を問題にするのではなく、むしろ保存すべき古器物として「霹靂礎」を含めていることを評価したい。そして「人造物部」に含めている以上、「霹靂礎」が人によって製作したものであるという判断であつたことに意義を見いだしておくことが大切である。

ところで神田は単に古器物の収集にとどまらず、明治一七年には自らの所蔵品と同好の人々が所蔵していた石器、さらには明治天皇に献上された御物石器（現在、宮内庁書陵部所蔵）を掲載した『NOTES ON

ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c. OF JAPAN】(日本名『日本大古石器考』)を刊行している^⑩。この図書は神田の収集と研究の集大成といっても過言ではないが、本書に示された研究成果を見ておきたい。神田は今日「石棒」と呼称している石器に対し「雷槌」と命名し、四つの分類をおこなっている。そして用途については「其用ハ明ラカナラスト雖恐クハ争闘ヲナシ又ハ武威ヲ示スノ具トナセシナラン」と記述する。そのあとこの「雷槌」を使用した人々についても、大森貝塚の発掘成果を踏まえて考察を試みている。このように、名称については江戸時代以来の「雷」の文字を付しているが、型式分類とその用途の考察は、十分に考古学の成果として位置づけられ、明治六年の博覧会から十年足らずの年月しか経ていないものの、学問としての進歩を認めることができる。

そしてこの『日本大古石器考』には、明治六年の『目録』に掲載された石棒のうち二点が掲載されている(写真5)。「目録」の一番上に示された石棒は『日本大古石器考』第Ⅷ図の4であり、上から三本目は同書第Ⅷ図の1であることがわかる。そして1の解説文は「原形三分一、両頭アリ質ハ石盤石ナリ○両頭アルモノヲ第一種トス」とあり、4の解説文は「原形三分一、両頭アリ両頭接近ノ所ニ浮輪アリ又其一頭及ヒ之ニ近接セル棍体ノ一部ニ飾紋ヲ刻セリ質ハ板状粘石ナリ○別ニ一図ヲ附シ頭部ノ全面ノ原形ヲ見メス全面ノ中部ニ把鼻アリ其両側ニ小孔アリ然レトモ貫通セス」となっている。この解説文を見ても、今日の考古学的な観察とひげをとらないものである。

さて、明治六年の展覧会に神田が出品した石棒四点のうち、三点が関西大学博物館所蔵品の中に同定できたので紹介しておく。『目録』の一番



写真5 『日本大古石器考』図版Ⅶ (註17文献より転載)

上に描かれた石棒は（『日本大古石器考』第Ⅶ図4）、長さが「一尺五寸八分」、中央部の太さが「一寸四分」と記されている。この大きさの記述と形状から、この石棒は本山資料番号二四四の「磨製両頭石棒」であると判断した（写真6）。その長さは四七・六センチを測り、「一尺五寸八分」とは数ミリの誤差しかない。そして一端の頭部には小突起が二つ作られており、貫通していない孔が認められる。さらにこちら側の端部から二〇センチほどのところに二条の沈線を刻み、その間には不整形な菱形の連続文様を施す。この形状と文様は刀、若しくは剣の柄の表現のようにも見え、石棒の用途として神田が推定したように「武威ヲ示スノ具」というものが妥当であるようにも思われる。石材は、近年の調査では「蛇紋岩（Serpentine）」と鑑定されている。^⑧

続いて『目録』の三番目に描かれた石棒は（『日本大古石器考』第Ⅶ図1）、本山資料番号二四一の「両頭石棒」であると判断した（写真7）。『目録』には、長さが「一尺九寸八分」、中央部の太さが「二寸二分」と記されており、現状では六〇・〇センチ、体部最大径六・六センチを計測し、この数値が一致する。さらに大きさだけではなく、原物の片方の頭部は少し欠損しており円形の剥離痕が認められ、描かれた図においても右側に描かれた頭部が円形に剥離している状況が確認できる。このように大きさと、欠損している頭部の特徴からこの同定はまちがいないと判断した。

もう一つ『目録』の一番下に描かれた石棒は、図の一部が欠損しており全長の記載を読み取ることができない。また、図の頭部付近が破損しているため形状も一部不明確である。よって同定作業には一部不確かな



写真6 関西大学博物館所蔵石棒（本山資料番号244）



写真7 関西大学博物館所蔵石棒（本山資料番号241）



写真8 関西大学博物館所蔵石棒（本山資料番号217）

ところがあるが、本山資料番号二一七であろうと推定した(写真8)。絵図から読み取れる情報としては、体部の直径が「二寸一分」であり、現状で計測した六・四九センチとほぼ一致する。本品は出土地が「車鄉村富岡」とあり、現在の群馬県高崎市箕郷町富岡周辺であると推定できる。石材は緑泥片岩であり、この地域で産出する石材である。なお、この石棒は『日本大古石器考』には掲載されていない。

以上、神田が所蔵し、明治六年の「博覧会」に出品された石棒を見てきた。彼は博覧会以後もこれらの石棒を所持していたと考えられ、明治一七年に刊行した著書に掲載したと考えられる。彼はコレクションを生前は手放さず、没後本山彦一に引き継がれ、そして現在は関西大学博物館に収蔵されることとなった。その一方で、神田以前の所蔵者については不明である。彼が短期間で膨大なコレクションを形成していることを鑑みると、その収集方法は古物商から一括して買い上げる方法をとったと考えられる。それゆえ出土地等の情報は不明であり、来歴がわかる資料は少ないことが指摘できる。

続いて、森俊滋が出品した銅鐸についてみていきたい。まず彼の略歴であるが、天保四年(一八三三)に、播磨国三日月藩第八代藩主長国の次男として生まれ、嘉永元年(一八四八)に第九代の藩主となる。そして明治二年には版籍奉還によって藩知事となり、結果的には最後の三日月藩主となった人物である。

さて、出品された銅鐸についてであるが、結論を先に記すと、この銅鐸は文化一一年(一八一四)に、三日月藩内下本郷で出土したものであり、現在は米国メトロポリタン美術館が所蔵しているものであることが

判明した。この銅鐸をめぐることは、諸先学の研究に従って記述を進めていくこととした。

この銅鐸を最初に学界に紹介した人物は、島田貞彦氏であり大正一四年刊行の『考古学雑誌』に「播磨国三日月村本郷発見の銅鐸に就て」という論文を発表した⁸⁾。論文の要旨としては、銅鐸の図が描かれた史料が発見されたことから、図の詳細な解説と出土状況などを考察している。この史料は写真9に示したように出土日・出土状況を伝える文章が記されており、文化一一年(甲戌)五月一七日に地元農民が自分の畑から不時に発見したものであることがわかる。さらに当時は用途が不明であり、「宝鐸」として扱われたことが記されている。そしてこの絵図の記述の中には「総高サ四尺八寸」とあり、さらに「筒ノ高サ二尺五寸五分」「上ノ齒高サ八寸三分」という記述がある。鐸身の数値と鈕の数値を足すと「三尺三寸八分」であり、記載されている総高との間に「一尺四寸」以上の違いが生じている。この大きさの記述の曖昧さが、この銅鐸の同定を難しくすることになるが、この点は後述する。

さて、島田氏はこの銅鐸の所在について、発見された当時に藩主に献上されたとの情報から、東京に居住していた旧藩主である森子爵家に問い合わせたものの「斯かるもの、片影もない」という返事であり、「其の存在の有無に就ては今の處、判明することが出来ない」と結んでいる。問い合わせた時点の当主は、俊滋から二代後の俊成であったと思われる。俊滋とは従弟の続柄になるが、彼が家督を継いだ時には(明治三三年)すでに森家にはなく、その存在さえ伝えられていなかったことになる。

続いてこの銅鐸を検討した論考としては、梅原末治氏が名著『銅鐸の



写真9 「下本郷銅鐸」絵図（註20文献より転載）

研究』において「下本郷銅鐸」として取り上げている。梅原氏も先述の絵図を紹介するとともに、銅鐸の行方については次のように記す。

「鐸そのものは藩侯の家に伝えられ明治に及んだが数年前に故あつてこれを他に売却し、為にいま行方を失したとの事である。」

この記述において梅原氏は売却の事実を明らかにし、明治になっても旧藩主の手元にあったことの根拠として、俊滋が博覧会事務局に対し一個の銅鐸を記載し、さらに次のような注記を付した書状を提出した事実を伝える。

「文政之度旧縣地ヨリ掘出候品惣尺二尺九寸二分少々損ジ有之」

ここでも問題となるのが銅鐸の大きさであり、梅原氏も「三尺三寸八分」と、この書状にある数値との差が五寸近くあることから、絵図に描かれた「下本郷銅鐸」と、俊滋が博覧会事務局に示した銅鐸が同一であるものかの判断を保留している。

梅原氏が示した博覧会事務局宛の書状は、その出典が示されていないために、その実物を見ることができない。しかしこのような書状の存在は、先述した博覧会事務局から旧藩主に発した「口達」がそれなりに効力があり、明治六年の博覧会にこの銅鐸が出品された経緯を明らかにするものといえよう。

次に、この「下本郷銅鐸」が現在米国メトロポリタン美術館に所蔵されていることを突き止めた置田雅昭氏の論考を見ていく。置田氏は勤務する天理参考館に先ほどの絵図によく似た銅鐸があることから、この銅鐸の行方を追及することとなった経緯を記す。そして「下本郷銅鐸」について、江戸時代からの文献史料を網羅し、メトロポリタン美術館が所蔵する銅鐸がこの「下本郷銅鐸」にほぼまちがいないという結論を導く。しかしながら唯一の解消できない不安として、やはり「法量」を指摘する。すなわち現在メトロポリタン美術館が所蔵する銅鐸は高さ一一〇・五センチ（四三・五インチ）となっており、この数値はこれまで示した文献に記載されているどれとも一致しない（写真10）。よって、現在行方不明となっている絵図と、大正年間の初め頃までは地元にあったという銅鐸の破片が発見され、メトロポリタン美術館所蔵銅鐸と接合するという事実がない限り不安は解消できないと結んでいる。

以上、「下本郷銅鐸」の出土した経緯から、旧藩主森家に伝わった事実と、現在はメトロポリタン美術館に所蔵されている銅鐸の可能性が高いことを紹介してきた。そこで、もう一度明治六年の博覧会において刊行された『目録』の図を見ていきたい。図は写真11に示したとおりであるが、この図の上には「三尺六寸八分」という法量が記述してある。この



写真10 メトロポリタン美術館所蔵銅鐸（註21より転載）

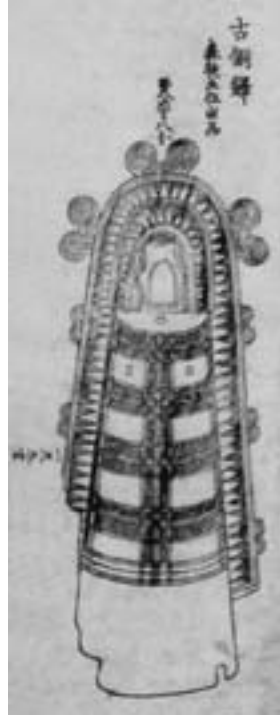


写真11 森俊滋出品銅鐸絵図（写真2一部拡大）

数値をセンチに換算すると一一・五センチほどであり、メトロポリタン所蔵銅鐸との誤差は一センチ程度であることがわかる。すなわち、明治六年に森俊滋が出品した銅鐸は、メトロポリタン美術館所蔵銅鐸と法量、文様等の諸特徴が一致することからまちがいないと判断できるものである。この『目録』に描かれた図を介在させることによって、置田氏

の同定は正しいことが証明でき、唯一心配としてあげた法量が一致しないという問題も解決したものと考える。結果的には大正年間に発見された絵図に記されていた数値、そして俊滋が博覧会事務局に提出したとされる文書の数値が間違っていたと判断できる。

なお、メトロポリタン美術館のホームページを確認すると、この銅鐸は一九一八年（大正七）に同美術館に収蔵されたことが記載されている。すなわち島田氏が論考を発表した大正一四年には、この銅鐸はすでに海を渡っていたことになる。この時の当主俊成は、俊滋の直系ではないことから、この銅鐸についてまったく知らなかったことは十分考えられることである。そうなるかと推定ではあるが、この銅鐸は俊滋が逝去した明治一二年に当主となった、第一〇代長祥によって売却された可能性が考えられる。しかしながらその流出ルートは明らかにになっておらず、売立目録等の有無についても不明である。

以上、明治六年の博覧会に際して刊行された『目録』に絵図が掲載されている神田孝平所蔵石棒と、森俊滋所蔵銅鐸について現在残されている資料との同定作業を試みた。その結果、石棒は関西大学博物館に所蔵されており、銅鐸はメトロポリタン美術館が所蔵しているものにまちがいないという結論を得た。筆者は銅鐸については不勉強であるが、型式的に最も新しい銅鐸の出土地が明確になったことは、十分に今日の考古学資料としての価値を見いだせるものと考ええる。

また神田が所蔵していた石棒は、結果的にはその来歴は明らかにし難いものではあるが、石棒の用途を考察していくうえで是有文石棒の一例として資料的価値を有しているものと考ええる。²²

五、まとめ

二〇〇九年に世界中で開催された展示会のうち、一日あたりで最も多く入場者を集めたものは、東京国立博物館を会場とした「興福寺創建一三〇〇年記念 国宝阿修羅展」であり、一五九六〇人／日であったことが報じられた。²³ 同じく第二位は「第六一回 正倉院展」の一四九六五人／日、三位は「皇室の名宝——日本美の華」九四七三人／日、四位「ルーブル美術館展」九二六七人／日と続く。五位によくフランス国ケ・ブランリ美術館で開催された展示会が入っているが、一位から四位までを日本でおこなわれた展示会が占めたこととなる。このデータを発表した英国雑誌は「日本の展覧会好きは不況知らず」と題して報じている。²⁴ 確かに興福寺の阿修羅像が東京で公開されたのは、昭和二十七年以来約六〇年ぶりとのことであり、入場を待つ人々の長い行列が報じられたことは記憶に新しい。

その一方で、二〇一〇（平成二二）年八月一七日の読売新聞では、戦後一貫して増加してきた博物館が減少したことを報じている。²⁵ 博物館が減少していること、あるいは閉館の危機に瀕している博物館が珍しくないことは身近に聞く話であって、大阪府下の博物館においても経済効率を錦の御旗として、閉館を取りざたされている館は少なくない。前者の事実と後者のニュースに接した時、わが国の現状は「博物館大国」なのであろうか、「博物館貧国」なのであろうかと戸惑いを感じざるを得なかった。

筆者のことで恐縮であるが、先の報道で入館者数第三位となった「皇

室の名宝——日本美の華」展に考古部門の担当者として係わった。そのわずかな経験から、以下の記述を進めていくことをお許し願いたい。この展示会は今上陛下ご即位二〇周年と、天皇皇后両陛下ご成婚五〇周年を記念して開催されたものである。それゆえ宮内庁の各部署が所管する美術品・考古品が一堂に会すこととなり、正倉院御物も約二〇年ぶりに東京で展示された。特に、三の丸尚蔵館が所管する優品はそのほとんどが展示されたといってもよく、特に伊藤若沖の代表作『動植綵絵』三〇幅が一室に並べられたことは大きな話題となった。そして筆者の担当した考古品では、正倉院御物に至るまでの美術を代表する資料として、縄文時代の御物石器から古墳時代の銅鏡や埴輪、さらには飛鳥時代の四環壺を展示した。²⁶ この考古品は会期の後半に展示され、展示会場に入ってすぐのところと並べられたこともあって、常におおぜいの観覧者で賑わっていた。

筆者が所属する書陵部には常設の展示場がなく、所管する考古品も序外の博物館に貸与することではか、一般の方々が目にする機会はないものである。それゆえ、今回の展示会において多数の方にご覧いただいたことは大変嬉しいことであり、意義のあることだと考えている。そして多くの方々から「御物石器の名称の由来をはじめ知りました」「御物石器って、何に使ったんでしょうね」であるとか、直弧文鏡の文様を見て「どうやって描いたのでしょうか」「どんな意味があるのでしょうか」等々、多数のご質問も頂戴した。このように多くの方が当庁の考古品に興味を持ってもらうことは展示担当者としての喜びであり、会場において観覧者の生の声を聞くことは、一般の方々が考古資料をどのように見

ているのかということを変更して知るよい機会となった。

しかしである、このような質問を受けながら残念というか、申し訳のない気持ちを抱いたことも事実である。なぜならば御物石器と直弧文鏡の一面は、ここ何年も「皇室の名宝」展が開催されたと同じ東京国立博物館平成館一階にある「考古展示室」に展示されているにも拘わらず、このことがいかに知られていないかを痛感させられる結果であったためである。御物石器も直弧文鏡もそれぞれの時代を代表する遺物としてここ数年は、東京国立博物館に常設展示されているとあってよい状況となっているものの、今回「皇室の名宝」展に來観された方の何人が同じ建物の階下にある展示室で、いつでもこの資料を觀覽できることをご存じであったであろうか。前述のような質問を受けるたびに、これまで貸与したことで満足し、この遺物についての広報が不足していたことを思い知らされる結果となった。

この点では阿修羅像も同様であり、興福寺国宝館において（リニューアル前であっても）いつでも拝観可能な状況であったこともまちがいない。もちろん御物石器も直弧文鏡も阿修羅像も、常時見られるものであるからといってその価値が下がるものではなく、特別展の展示構成において必要だからこそ、その場に出品されたものである。よって資料の価値にはまったく違いがないはずであるが、常設展に列ができたという話は聞かない。あるいは、平成館の特別展会場が身動きのとれない状況であるにも拘わらず、階下の常設展示場は休館であろうかと疑うほど人がいないことはしばしば経験することである。このような状況こそが、わが国が「博物館大国」でもあり、その一方「博物館貧国」でもあること

を物語っているのではなからうか。

それでは、なぜこのようなことが起きるのかということを考えてみると、一つには「宣伝」の有無が非常に大きなウェイトを占めていると考える。特別展となれば共催するテレビ局・新聞社が自社の媒体を最大限に使用し、様々な観点から報道する。例えば、「〇〇展入場者数〇〇人突破」という見出しが躍り、関連行事として開催されるシンポジウムなどが大々的に取り上げられる。今回の阿修羅像は約六〇年ぶりの東京における出品であり、今後いつ東京で展示されるかどうか不明であるというような報道に接すれば、この機会には是非見ておきたいというのが人情であろう。「煽る」という表現は不適切かもしれないが、連日のように新聞・テレビで宣伝されれば、多くの人が足を向けるのは必然である。このことは決して悪いことではなく、わが国が「博物館大国」たるべく潜在的能力を示していることと捉えることもできる。すなわち開催できる会場があり、多くの人を魅了する美術品があり、なおかつそれを安全に輸送し、展示する技術力を有していると考えられることもできる。そして何よりも世界で第一位から第四位を占めるほど、人々が博物館に関心を持ち、觀覽する時間と金銭を費やすことができるという民度の高さを証明しているといってもよからう。

一方、「博物館貧国」に陥る危険性としては、宣伝量が多いものがよい展示であるというような印象を人々に与えることと考える。さらには珍しいもの、あるいは初公開された出品物のみ展示の意義があるという、誤った印象を植え付けることである。いかなる展示会であれ、担当する学芸員にとって、そこにその出品物を並べている意義があるはずである。

珍しいものを並べるだけでは、より珍しいもの、より大きいものを陳列しなければならぬという際限のないスパイラルへ陥るだけである。観覧者を「初公開」「史上最大」「空前絶後」というような宣伝文句で集めたとすれば、「次は」「次は」というより大きな刺激を期待させることになり、いずれ行き詰まることは目に見えている。

「博物館貧国」にならないようにするために筆者ができることとしては、常時平成館に御物石器や直弧文鏡が展示してあることを知ってもらうべく努力することであろう。確かにマスコミが常設展示を取り上げることが少ない。これは協賛という事実がないにしても、マスコミは非日常を報道することが使命であり、常設展示を取り上げることが期待できない。それゆえどうやって広報するかという課題は残るが、ホームページ等を利用して地道に説明を重ねていくしか方法はないであろう。

— としてもう一つ大切なことは、入場者が多い展示会が成功であるというような間違った判断を良しとしないことである。展示会の善し悪しが、入場者数だけで測れるものとするならば、学芸員には珍しいものを陳列することだけが求められてしまう。そこには展示会のコンセプトも何もなく、とにかく珍しいものが並び、さらにマスコミによる宣伝が加われば集客は可能ということになってしまう。これでは「博物館」以前の、江戸時代における「見せ物」に逆戻りしてしまうのではなからうか。観覧者を集めることだけを、展示会の目的にしてよいのであろうか。経済効果という点だけで博物館の存在意義を論じられるものであろうか。博物館においてその資料が、その展示会に出品されている意義をもう一度、一四〇年前の博覧会に遡って考える必要があるであろう。

小稿では、明治六年に何を並べることが博物館の使命であるかを、暗中模索していた時代の展覧会を取り上げてきた。そこには、今の博物館では考えられないような多種多様な資料が並べられていた。しかしその中から人が作ってきたものから歴史を復元するという概念が誕生し、考古学という学問に発展していったことはまちがいない。今、博物館は「冬の時代」といわれ、学芸員の需要も先細りとされている。しかるに一方、わが国では世界で最も人が集まる展示会を開催していることも事実であり、博物館需要の潜在意識は高いともいえる。この意識を確実に引き出すことができれば、「冬の時代」を乗り越えることは可能であると信じている。そして名実ともに文化立国として、観覧者数世界一を誇る真の「博物館大国」となる日を期待し、その一端を担うことができるよう努めていきたい。

註

- ① 椎名仙卓『明治博物館事始め』思文閣出版 一九八九
椎名仙卓『日本博物館成立史——博覧会から博物館へ——』雄山閣 二〇〇五
- 関秀夫『博物館の誕生——町田久成と東京帝室博物館——』岩波新書(新赤版) 九五三 二〇〇五
- ② 『集古十種』については、左記展示会図録を参照した。
福島県立博物館『あるく・うつす・あつめる 松平定信の古文化財調査集古十種』二〇〇〇

- ③ 吉田衣里「古物——江戸から明治への継承——」『近代画説』二二 明治美術学会 二〇〇三
- ④ 平賀國倫編『日本古典全集 物類品隨』日本古典全集刊行会 一九二八
- ⑤ 斎藤忠『木内石亭』人物叢書 新装判 吉川弘文館 一九八九
- ⑥ ウィーン万国博覧会については、左記図書を参照した。
- ⑦ 角山幸洋『ウィーン万国博覧会の研究』関西大学出版部 二〇〇〇
- ⑧ 徳田誠志「H・V・シーボルトと関西大学博物館所蔵資料——日本考古学黎明期の一断面——」『関西大学博物館紀要』九 二〇〇三
- ⑨ 「告示文」は、左記の図書から引用した。
- ⑩ 「明治六年の博覧会」『東京国立博物館百年史』九〇頁 東京国立博物館 中央論美術出版 二〇〇四
- ⑪ 東京文化財研究所『明治期府県博覧会出品目録——明治四年～九年』中
- ⑫ 斎藤忠編『日本考古学史資料集成』2 明治時代一 吉川弘文館 一九七九
- ⑬ 「口達」は、左記の図書より引用した。
- ⑭ 「(3) 博覧会事務局、在京華族に口達する」『東京国立博物館百年史』資料編 六一〇頁 東京国立博物館 一九七三
- ⑮ 「東京国立博物館百年史」資料編には、一例として「土岐頼知」が博覧会事務局へ提出した書類を掲載している。
- ⑯ 「(5) 在京華族土岐頼知ら所持品目録を届け出る」『東京国立博物館百年史』資料編 六一〇頁 東京国立博物館 一九七三
- ⑰ 神田孝平の業績については、左記論考を参照した。
- ⑱ 角田芳昭「『日本大古石器考』資料論考」『考古学叢考』斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会 吉川弘文館 一九八八
- ⑲ E・S・モースの出版した大森貝塚の報告書については、左記図書を参照した。
- ⑳ 近藤義郎・佐原真編訳『大森貝塚 付関連史料』岩波文庫 青四三二一 一 岩波書店 一九八八
- ㉑ 「尚古図録」については、左記図書を参照した。
- ㉒ 斎藤忠編『日本考古学史資料集成』2 明治時代一 吉川弘文館 一九七九
- ㉓ 「霹靂確」については、左記図書を参照した。
- ㉔ 斎藤忠「へきれきちん」『日本考古学用語辞典』学生社 一九九二
- ㉕ 「日本大古石器考」については、左記復刻版を参照した。
- ㉖ 神田孝平『日本大古石器考』復刻日本考古学文献集成 第六回配本 一書房 一九八三
- ㉗ 各石棒の石材の同定については、左記図書を参照した。
- ㉘ 「関西大学考古学等資料室所蔵 石器資料の石質調査」古文化財保存科学研究会調査報告 関西大学工業技術研究所 一九九〇
- ㉙ 島田貞彦「播磨國三日月村本郷発見の銅鐸に就て」『考古学雑誌』第十 五巻第十号 一九二五
- ㉚ 梅原末治「(二) 下本郷銅鐸」『銅鐸の研究』大岡山書店 一九二七
- ㉛ 置田雅昭「兵庫県佐用郡三日月町下本郷発見の銅鐸について」『兵庫県の歴史』26 兵庫県史編集専門委員会 一九九〇
- ㉜ なお、天理大学付属天理参考館所蔵の銅鐸については、同館学芸員藤原 郁代氏よりご教示賜った。記して感謝申し上げます。
- ㉝ 有文石棒についての研究は、左記論考を参照した。
- ㉞ 山田康弘「有文石棒の摩滅痕——茨城県岩井市香取塚古墳表採品の石

棒を中心に——」筑波大学 先史学・考古学研究』第五号 一九九四

②③ 朝日新聞 東京版 二〇一〇年四月一日「阿修羅展、入場者数で世界一位 英誌が〇九年調査」

②④ 「Japans love of exhibitions proves recession-proof」『THE ART NEWS-PAPER』 NO.212 APRIL 2010

②⑤ 読売新聞 東京版 夕刊二〇一〇年八月一七日「博物館 攻めて生きる」

②⑥ 東京国立博物館「第一章 古の美 考古遺物・法隆寺献納宝物・正倉院宝物」『皇室の名宝——日本美の華』2 二〇〇九

備考…写真の出典は次の通り。

写真1・6～8 筆者撮影

写真2～4・11 東京国立博物館提供

写真5 註17文献より引用

写真9 註20文献より引用

写真10 註21文献より引用